

間野英二著『『バーブル・ナーマ』の研究 I 校訂本』

(1995年2月 松香堂/B5版 610+lix頁 18000円)

A. アブドゥガフーフ・A. オリンバーエフ
(久保一之訳)

訳者序

本稿は、ウズベキスタン共和国文化省とウズベキスタン作家同盟が発行している週刊新聞『ウズベキスタンの文学と芸術(Ўзбекистон адабиёти ва санъати)』第3348号(1996年第11号/3月15日付)に「日本人研究者の学問的壮挙——『バーブル・ナーマ』校訂テキスト日本版——(Япон олимпиадинг илмий жасорати: «Бобурнома» танқидий матнининг япон нашри)」と題して発表された書評の日本語全訳である。

ムガル朝の創設者で、トルコ散文学史上の傑作『バーブル・ナーマ(Bābur-nāma)』の作者、ザヒールッディーン・ムハンマド・バーブル Zahir al-Dīn Muhammad Bābur(1483-1530)は、ティムール朝の王子として生まれ、その故郷は、現在のウズベキスタン共和国フェルガーナ州アンディジャン市である(現在同市にはバーブル博物館がある)。バーブルは、現ウズベキスタンの地で青少年期を過ごし、主に、当時の中央アジアのトルコ文章語である、チャガタイ・トルコ語(古ウズベク語とも呼ばれる)で著作活動を行った。

現在ウズベキスタンにおいて、バーブルの著作は、国民的詩人ナヴァーイーの著作と同様に広く愛好されており、特に『バーブル・ナーマ』は、バーブルが生きた時代の魅力と相俟って、絶大なる人気を誇る。一般のウズベク人の中にも、専門家に匹敵するほど『バーブル・ナーマ』とその登場人物に精通した者が見受けられ、また1990年には連続テレビドラマ「バーブル・ナーマ」が放映されて、多くのウズベク人がテレビの前に釘付けとなった。

もちろん、学術研究の領域でも非常に関心が高く、この回想録・歴史書は、自国史や母語文学史における極めて重要な研究対象と認識されており、記念学会も開催されたという。ウズベキスタンの東洋学界は、ほぼ疑いなく、世界中で最も『バーブル・ナーマ』に対する関心が高く、最も『バーブル・ナーマ』に精通した学界であると言える。

そういう学界において、『バーブル・ナーマ』に関する外国人研究者の業績が、大きく取り上げられたこと自体、非常に両期的な出来事である。しかも、本書評の二人の著者は、それぞれ文学研究と歴史研究の分野で、現在のウズベキスタン東洋学界を代表する著名研究者である。当該書の出現が、いかに大きな衝撃を斯界に与えたかが理解されよう。

本書評の現代ウズベク語原文を翻訳するにあたっては、下記の諸点を改めた。

- (1) 当該書校訂テキストからの引用部分も日本語で示し、訳文は間野英二『『バーブル・ナーマ』の研究 (I)「フェルガーナ章」日本語訳』『京都大学文学部紀要』第22号(1983)および、同『同(II)「カーブル章」

日本語訳』『同』第23号(1984)に従った。「ヒンドウスターン章」については、間野氏の未発表原稿「『バーブル・ナーマ』「ヒンドウスターン章」日本語訳」を参照させていただいた。

- (2) 原文では、ウズベキスタン出版の『バーブル・ナーマ』刊本から引用した箇所には、ページ数が記されていない。本稿では、次の二つの版について調べ、ページ数を掲げておいた。

1960年版：Заҳириддин Муҳаммад Бобир. Бобирнома. Нашрга тайёровчилар : П. Шамсиев, С. Мирзаев. Тошкент, 1960.

1989年版：Заҳириддин Муҳаммад Бобур. Бобурнома. Нашрга тайёровчи : П. Шамсиев. Муҳаррир : А. Ўқтам. Тошкент, 1989.

- (3) 引用部分の原テキスト表記は、キリル文字転写からラテン文字転写に改めた。
 (4) 著者および当該書を指す繁雑な表現を、適宜「著者」、「本書」などに置き換えた。
 (5) 「我々」という表現は、必要に応じて、「ウズベキスタン」、あるいは「我々ウズベキスタン国民」という表現に改めた。
 (6) 頻出する『バーブル・ナーマ』という書名は、繁雑になる際には省略した。
 (7) 説明が必要な場合は訳者注を付した。簡単な補足・説明は本文中[]内に示した。

I

チャガタイ・トルコ文学の傑作であり、15-16世紀の中央アジア・アフガニスタン・インド研究のための無比の史料である『バーブル・ナーマ』のアラビア文字による校訂本を、日本の一出版社から刊行できることは、まるで夢のようであり、とても現実とは思われぬ気がする。[p. ix]

深い満足感と自負心を湛えているこの文章は、まさにこの出版を実現させ、それによって文字通り学問的壮挙をなした著名日本人研究者、間野英二教授の心境を表わしている。

間野教授は、まだ京都大学の学生であった時に、バーブル個人とその大著『バーブル・ナーマ』の真の支持者となり、30年以上にわたってこの情熱、すなわち“初恋”に完全に忠実であり続けた。絶えずこの対象を探究し、トルコ語、ペルシア語、アラビア語に十分習熟した。

この研究者の素晴らしい研鑽の結果、今日の印刷の最新技術を用いて、高級種の紙で出版された『バーブル・ナーマ』校訂本がここにある。約七百頁強を容れるこの大著は、日本の京都市にある出版社、松香堂で1995年に刊行された。

公正を期すため、特に以下のことを確認する必要がある。[ウズベキスタンでは]今世紀の40年代末に偉大な二人のテキスト研究者、シャムスィーエフ(П. Шамсиев)とミルザーエフ(С. Мирзаев)によって最初に『バーブル・ナーマ』の出版準備がなされ[Бобирнома. Нашрга тайёровчилар: П Шамсиев, С. Мирзаев. I - II қисм. Тошкент, 1948-1949]、後にはシャムスィーエフの努力によって、さらに訂正が加えられ、完成された(1960年タシュケント刊)[=本稿でいう1960年版]。現在までに幾度か再版されたこの刊本は、本質的に学術的校訂テキストの水準にあった。というのも、これらの明敏な研究者たちは、自分たちが利用した『バーブル・ナーマ』の定評ある二つの史料、すなわち1857年イルミーンスキー(Н.И.

Ильминский) がカザンで出版した刊本 [*Baber-nameh diagataice ad fidem codicis petropolitani*, ed. N. Ilminski, Cazani, 1857] と1905年ベヴァリッジ女史 (A.S. Beveridge) がロンドンで出版した刊本 [*The Bābar-nāma. Being the Autobiography of the Emperor Bābar, the Founder of the Moghul Dynasty in India, written in Chaghatāy Turkish; now reproduced in Facsimile from a Manuscript belonging to the late Sir Sālār Jang of Haydarābād*, ed. A.S. Beveridge, London, 1905] の真剣な相互比較を行い、また必要な箇所ではトルコ語訳とロシア語訳を参照して、原典テキストの復元を目指し、優れた成果を得たと断言できるからである。

このウズベク人研究者たちは、学術的校訂に要求される、テキスト研究の全ての面で十分なことを行ったが、たったひとつの問題、すなわち支配的イデオロギーによる障害の前に無力であった。ここで言いたいのは、学術的校訂テキスト作成の根本的条件のひとつ、テキストを原典が書かれた正字法、つまりアラビア文字で出版するという条件をみたすことが、当時は非常に困難であったということである。

本書の著者もシャムスィーエフとミルザーエフの本格的で困難な研究を特記し、彼等の作成した刊本が、校訂テキストとして精微なものであると述べている¹⁾が、同時に、正にこの状態(つまり、出版が原典の正字法によらないこと)が主要な欠点であるとも記している [p. ix]。我々としては、日本人研究者のこの指摘が正しいことを認めつつも、非は、刊本を作成したウズベク人研究者たちではなく、その時代状況に帰したい。

間野教授は、自著に付した序文の中で、水準的には校訂テキストと呼べる、いま一つの刊本について述べている。その言によれば、ハーヴァード大学教授サクストン (W.M. Thackston, Jr.) が、原典二写本と二つのペルシア語訳本に基づいて、最近アメリカで『バーブル・ナーマ』の出版を行った [*Bābumāma : Chaghatay Turkish Text with Abdul-Rahim Khankhanan's Persian Translation*, ed. W.M. Thackston, Jr., 3 vols., Cambridge, Mass., 1993]。間野教授は、この刊本にも多くの欠点があり、また本当の意味で校訂テキストとみなすには、これが原典の文字ではなくラテン正字法で出版されたことが、障害であると指摘している [p. ix]。

原典の正字法、つまりアラビア文字、それも美しい書体の文字を用いて日本で出版された史上初の校訂本に話を戻すと、その扉に[チャガタイ・トルコ語で]「サヒールッディーン・ムハンマド・バーブル『バーブル・ナーマ/ワカーイー (Waqā'iyi)』間野英二の努力・研鑽によって編纂・印刷された」と書かれていると同時に、京都市の出版社、松香堂で1995年に出版されたと記されている。この日本人研究者が書名を、『バーブル・ナーマ』と並んで、『ワカーイー』とも特に明記しているのは、決して根拠のないことではない。

というのも、我々ウズベキスタン国民の偉大な祖先が著した傑作は、『バーブル・ナーマ』と呼ばれるのが慣例となり、近代にこの呼称が専門家たちによって容認され、広まったのである。バーブル自身はというと(それから、とりわけ[バーブルの娘で *Humāyūn-nāma* の著者である] グルバダン・ベギム Gulbadan Begim や[バーブルの従兄弟で *Tārīkh-i Rashīdī* の著者であ

る]ミールザー・ムハンマド・ハイダル Mirzā Muḥammad Ḥaydar も)これを『ワカーイー』と呼んだ。原典の復元を目指した校訂本において、著者は、当然、後代に生じたこの変化を書きとどめずにはいられなかったのである。

本書中の研究・序文から、著者が校訂テキスト作成のために、知見に及んだ最も完全で信頼できる四つの史料を参照したことがわかる。これらは、ハイダラーバードで発見された写本[現サーラル・ジャング博物館所蔵; 1905年のロンドン版はこの写本のファクシミリ]、エジンバラ写本[National Library of Scotland, MS. Adv. 18.3.18; 別名エルフィンストーン本]、1857年のカザン版、それにロンドン写本[British Library, MS. Add. 26324]で、専門家たちによって定評を得た史料である。同時に著者は、疑わしく問題のある個々の箇所を解明するため、原典が書かれてからあまり時を経ずに訳されたペルシア語訳本も広く利用したことを書き留めており、序文の中で「まさにその結果、私はテキストの多数の箇所を復元できた」と書いている²⁾。著者は、個々の写本、とりわけテヘランに所蔵されているテキストと、イルミーンスキーによるカザン版の元となった写本を、直接参照できなかったことが残念であると述べているが、「ただ、今回は、……優良さの点で1, 2を争うハイダラーバード、エジンバラの両写本を共に利用できたので、たとえこれらの未見の写本を利用していたとしても、本校訂本にそれほどの変更を加える必要もなかったであろう」[p. x]ということを確認している。

本書の校訂テキストを丹念に見てゆくと、著者のこの言葉には、本格的な学問的裏付けが存在することが証明される。本書について直接的に言えば、満足して、これが、テキスト研究の最新の優れた成果による、本格的な学術研究であると断言できる。

校訂テキスト全編を通じて、記載されたテキストが、ハイダラーバード写本とカザン版のどのページに基づいたかが一貫して記されている。この処置は、特に専門家にとって大変便利なものであり、必要な箇所ですべての史料と容易に対照することができる。利用された補助史料にある相違や追加は、テキスト研究に要求される条件を十分にみたして、特別な記号とともに脚注に載せられている。

本書は真に今日要求される高い水準で著されている。テキストの根本史料として選ばれた諸史料とそれらの系統・性格、採用された特殊記号や略号については、しかるべき情報が、日本語・英語の序文に詳しく述べられている。ここで、特に、著者が約1.5印刷全紙[1印刷全紙は16ページ分]を費やして、日本語で書いた研究篇[=「序論」(pp. xxiii-xliv)]について確認しておく必要がある。この研究篇において、『パーブル・ナーマ』に高い評価が下され、その学術的、芸術的、歴史的重要性が確認され、また現代にまで伝わった珍しい諸写本と、それらの研究史が詳しく解説されている。著者は、この作品が出来上がる過程、本来の題名、存在する諸翻訳について、該博な知識で議論をおこし、様々な言語で『パーブル・ナーマ』についてなされた多くの学術研究と、本書の関係、本書の価値を知らしめている。

また著者は[この研究篇において]、自身が作成した校訂テキストの主要な特徴、様々な写本に見られる大小の相違を記載するという方式、補助史料からテキストに採用された追加部分

や脚注に示された異同について、詳しい情報を与え、本書の校訂テキストを見てゆく過程で、読者が特に何を信頼すべきかということに注意を向けさせている。この研究篇は、本質的に校訂テキストの序論としての課題を超え、高度な学術的水準で書かれている。とりわけ、ウズベキスタンのパーブル研究の専門家たちによっては、まだ学術研究に利用されていない、様々な言語による一連の史料と研究についても言及が存在することは、特に価値がある。なお本書には、校訂テキスト作成の際に根本史料として利用された主要な写本や刊本の、個々のページの写真版が、付録として[口絵に]取められている。

要するに、著者は本当に偉大な学問的壮挙をなし、直接的な実用的価値もある本格的研究を行ったのである。大部のこの刊本、『パーブル・ナーマ』校訂本が単に第1巻に過ぎないことも特記する必要がある。著者は、序文において、研究の第2巻刊行に向けて邁進していること、この第2巻で、特にシャムスィーエフとミルザーエフによる刊本と、アメリカ人サクストン教授が作成した校訂テキストの、詳細な学術的性格付けと分析を[英文で]行うと告げている³⁾。

これに関連して、序文にあるもうひとつの重要で必地よい情報についても、簡単に述べておかなばならないであろう。著者は、可能であれば、翌年すなわち1996年から、母国語で、最終的な形の長期に及ぶ学術計画を、実行し始める予定であると述べている。この計画は本当に壮大で輝かしいもので、パーブルの子孫たる我々ウズベキスタン国民にとって特に名誉なことである。この研究者は、第一に『パーブル・ナーマ』の語彙集、ウズベク語[=チャガダイ・トルコ語]術語の十分な索引を作成するつもりである[既刊: 間野英二著『『パーブル・ナーマ』の研究Ⅱ 総索引』松香堂(1996)]。第二に、自身の作成した校訂テキストに基づいて、『パーブル・ナーマ』を日本語に全訳し、しかるべき学術的注釈をつけて発表することを計画している。その後の学問的夢も壮大で立派である。すなわち15・16世紀中央アジアに関連し、『パーブル・ナーマ』に関わるすべての文学的・歴史的史料を集め、分類し、出版することである⁴⁾。

著者のこのような学問的夢が完全に実現することを心から願う次第である。

II

校訂テキストとは、作者自身が記した内容や形態に対する、いかなる変更・省略も編集もない、作品原典の完全な復元を意味し、作品本体への、外部からのあらゆる関与を断固として拒絶する。まさにそれゆえ、本当の意味での校訂テキストは、常に大きな信頼と敬意をもって扱われ、すべての学術研究の基盤とされる。

いかなる校訂テキストも、大きな学術的価値のほかには直接的な実用的価値をも享受する。つまり、それが原典に基づいていること、あるいは原典に非常に近いことから、後のすべての一般向け出版物のための、信頼できる資料として貢献するのである。我々は十分に確信して、この原則が、間野教授の作成した校訂テキストについてもあてはまる、と言うことができる。

本書は、現代のテキスト研究が形成した学問的要求・条件をみたくして作成されている、と満

足をもって記そう。言っておかねばならないことであるが、著者は、15-16世紀のウズベク文章語 [=チャガタイ・トルコ語] に完全に通じ、そのすべての繊細な側面まで深く考えることができ、各々の単語・術語がどのような意味内容や力点において色合いを変えるかを、感知できる能力を持っているのである。

以下のことも長所としてあげる必要がある。著者は、叙述の論理的な一貫性や関連性を非常に重視し、結果として、他の諸刊本でそうであるように、思考上結び付こうが結び付くまいが、文を次々と互いにつなぐことをやめた。つまり、各々の新しい場面や一連の記述・描写を、それ自体の区域に分離することによって、テキストにおいて、情報や価値連鎖の、論理的統一性や内容的完結性を表現することに成功している。有機的なまとまりにも、場面の始まりと終りにも適切な注意を払っているのである。残念ながら、ウズベキスタンで出版された諸刊本については、このような結論は言えない。

全般に、本書の校訂テキストと比較することによって、[ウズベキスタンで出版された] 『バーブル・ナーマ』諸刊本に、一連の大小の欠点が生じていることを、明らかにすることができる。中でも重要なのは、ウズベキスタンの研究者たちによって、様々な配慮・判断やイデオロギー的の圧迫の影響下に、原典にあるいくつかの場面や、様々な文章の“妥当ではない”部分が意図的に省略されていたということである。

欠落記号を付され、ウズベキスタンの諸刊本から抜けたままになっていた場面の一つ⁵⁾は、本書の111-112ページに正しく配られている。16-17才の血気盛んな若者バーブルの生活について物語るこの場面は、分量が多いため、本稿では引用しなかった。しかしながら、多種多様な出会いや、放逸さと世俗的退廃にみちたバーブルの生き方をより完全に、また、より確実かつ自然に想像するには、比類の箇所であることを確認する必要がある。バーブルの極めて複雑な本性、心情の主要な特徴を観察する上で、また人格の諸側面、人間的な長所や短所を知る上でも、本書の校訂テキストに復元された場面の重要性は大きい。これは、自然な欲求、人間的な感情・本能が揺れ動いた瞬間の精神状態、内面的感性を、極めて生き生きと印象的に第一人称で書いた告白の書であると言うことができる。

本書の校訂テキストに復元されたこの場面の重要性は、上述の点に限らない。作家バーブル、詩人バーブルについて、非常に興味深く信頼できる情報を収めている点でも価値が高い。というのも、バーブルは正にこの場面において、はじめて、自分が詩人としても筆を握ることについて証拠を残しており、『バーブル・ナーマ』中に、はじめて自作の詩の1行(バイト)を引用しているのである。

16-17才のバーブルの最初の恋の詩は、以下のように素朴でめりはりがながいが、心がこもっている。

彼の人に対するわが炎、わが身を焦がし、我を狂気へとかりたてぬ。

(Men anga gharīb mayl paydā qıldım / Balkim anga özni zâr-u-shaydâ qıldım) [p. 111]

バーブルの詩作活動開始の例証となるこの詩自体が、[本稿によって]ウズベキスタンの出版物に初めて掲載されたということを、我々は満足して言いたい⁶⁾。

上に言及した(そしてウズベキスタンのすべての[→多くの]刊本で欠落したままになっていた)場面において、正に青年期にあったバーブルが、ペルシア語でも著述を行ったことについて述べられている。換言すれば、バーブルが芸術文学の舞台に最初から二つの言語で、つまりバイリンガルな作家として登場したことが理解される。

本書の校訂テキストで読んでみよう。

その頃私は1行ずつ2行ずつペルシア語で詩を作っていた。そのとき作った1行がこれである。

何人もわれ程に心みだれ恋い焦がれ恥辱にまみれる事なからん／何人もなれ程につれなく心づかいせぬ者またなからん(Hīch kas chūn man kharāb-ū-āshiq-ū-rasvā mabād / Hīch mahbūbī chu tū bīrahm-u-bīparvā mabād) [p. 111-1112]

内面的感性と感情の表現において、先に引用された母国語の詩の続編のように思えるこの詩の1行は、正に先述の詩と同じく、ヒジュラ暦905年、西暦1499-1500年に紙面にしたためられた。本書の校訂テキストで復元されたこの証拠が、大きな学術的価値を持つことは、否定し難い。

バーブルは、[同時代のトルコ系詩人で、チャガタイ・トルコ語韻文の *Shaybānī-nāma* の作者として知られる]ムハンマド・サーリフ Muḥammad Ṣāliḥ の詩を良く知っており、自分の気に入った模範例を心に焼付けていた。このことを我々が思い出すのは、本書の校訂テキストで原典通りに復元された場面においても、この事実が認められるからである。すなわち、バーブルは、ムハンマド・サーリフのペルシア語の詩の1行を引用することによって、人間の一定の状態における心情、繊細な感性を、極めて明瞭かつ生き生きと表現できることを、以下のように確認しているのである。

ムハンマド・サーリフのこの詩の1行が心に浮かんだ。

恋人を見るごとに私はほほを染める／友らが私を見やれば、私はあらぬ方に眼をそらす

(Shavam sharmanda har gah yār-i khvud-rā dar nazar bīnam / Rafiqān sūy-i man bīnand-u-man sūy-i digar bīnam)

この1行は不思議な程、状況にぴったりである。恋慕の情の激しさの故に、また若さと狂気に支配されて、私はターバンも付けず、靴もはかず、大路小路や大小の庭園をさまよい歩いた。知人にも見知らぬ人にも眼を向けず、また自分にも他人にも注意を向けなかった。[p. 112]

本書の校訂テキストの証言によれば、原典には、母国語で書いた以下のような詩も存在していた。バーブルはこれらを上述の引用部の後に付け加えている。

われ恋いにおち、われを忘れ狂いたり。知らざりき——美しき人々との恋の、これがまことであらうとは(‘Ashiq olghach bikhvud-u-divāna boldum bilmādim / kim parī rukhsāralar ‘ash-qīgha bu ermish khavāṣṣ)

私は時には愚者の如く独り山や野におもむき、また時には園や街区を小路から小路へとさまよった。進むも留まるも、それを選ぶ力はなく、行くも止まるもそれを決する力が無かった。

われに進むべき力なく、留まるべき力なし／ああわが心よ、この有様のとりことなせしは、そは
汝 (Ne barurgha quvvatim bar ne turarga tāqatim / Bizni bu hālatqa sen qilding giriftār ay
kōngül) [p. 112]

引用された最初の詩の 1 行が、バーブルの詩集にある叙情詩(ガザル)の中に存在することを、ここで述べておこう。

ウズベキスタンの諸刊本において欠落したままになっていた場面は、バーブルの生涯、人格、創作活動に関する一連の重要な証拠を収め、同時に、『バーブル・ナーマ』の芸術的価値を示す、際立った部分の一つであると思われる。

著者が校訂テキストにおいて、原典に従い、さらにいくつかの箇所を復元していることを満足をもって記そう。例えば、ウズベキスタンのすべての[→多くの]刊本において、コーランの気高き章句、高貴なハディースの文例、様々な祈願文が、当時のイデオロギー的圧迫のもとに意図的に取り除かれ⁷⁾、結果的に深刻な論理的ゆがみが生じていた。バーブルの人格、自我、世界観や信仰を十分に理解し正当に評価する上で極めて重要な、これらの省略部分が、校訂テキストでは、もとの状態、つまりアラビア語で正しい場所に配されたのである [pp. 192, 405, 406, etc]。実際、バーブルの信仰は完全なものであり、この真正なる信仰が、彼が自認しているように、つねに様々な災い・破滅から護ってくれたのである。

バーブルの個人的な世界観、信仰と関連するこのような告白が、学術的に扱われていることは非常に重要である。

本書の学術的・実用的価値は先に述べたことに限らない。本書では、ウズベキスタンの最初の諸刊本に生じた、一連の深刻な欠点がなくなくなっていることがわかる。本書の校訂テキストと比較することによって、ウズベキスタンの諸刊本では、いくつかの部分が完全に歪曲されてしまったこと、論理的一貫性を破壊する多くの混乱が生じたこと、そして、この悲しむべき状態が刊本から刊本へと写され、いままで続いてきたことがわかる。

いくつかの明白な例を引用しよう。ヒジュラ暦913年、西暦1507-1508年の出来事の叙述において、バーブルが[カンダハールの統治者である]シャー・ベク Shāh Beg [=シャー・シュジャー・アルゲン Shāh Shujā' Arghūn] と会戦して勝利をおさめ、シャー・ベクは逃亡したことについて述べられている。勝利の後バーブルが、シャー・ベクの財宝庫の管理に、自身の部下たちを任命したことが、次のように書かれている。

私はここを過ぎて、内城におもむいた。シャー・ベクの財宝庫の管理のためにホージャ・ムハンマド・アリー Khvāja Muḥammad 'Alī, シャー・マフムード Shāh Maḥmūd を……任命した。[p. 332]

この文章はウズベキスタンの諸刊本では、以下のように、誤って、論理的に矛盾した形で印刷されてきた。

私はここを過ぎて、内城におもむいた。財宝庫の管理のためにシャー・ベク(?), ホージャ・ムハンマド・アリー, シャー・マフムードを……任命した。[1960年版, 6. 275; 1989年版, 6. 191]

ウズベキスタンの諸刊本にあるもう一つの深刻な混乱は、バーブルの服毒事件の叙述に見

られた。周知のごとく、この恐ろしい暗殺計画は、バーブルによって打ち破られた[ローディー朝君主のスルターン・]イブラーヒーム Ibrāhīm の母親が、遠くで糸をひいて企てたのである。

ウズベキスタンの諸刊本においては

……の詳細は以下の如くであった。イブラーヒームの母親であるこの不幸な者が、次のようなことを聞き知った。[1960年版, 6. 375; 1989年版, 6. 281]

という不格好で不明快な文章が、もとはバーブルの手で以下のように流暢に書かれていた。

……の詳細は以下の如くであった。イブラーヒームの母親ブア, 不幸なる者が次のようなことを聞き知った。……[p. 492]

ウズベキスタンの諸刊本にある「この(bu)」という代名詞[・指示形容詞]は、もとは人名の「ブア(Bua)」であったこと⁸⁾は、事件後の叙述において、もう一度完全に確認される。暗殺計画に参加した女たちの運命について、ウズベキスタンの諸刊本では、以下のように、不明確で誤った文章が載せられている。

その女たちの1人は象の下敷きにさせた。他の1人は監視下においた。あの女も自らの行為のとりことされ、その報いを必ずうけることになるであろう。[1960年版, 6. 377; 1989年版, 6. 282]

この文章では二人の暗殺計画者について語られている。原典の方にある、三人の暗殺計画者を処罰したことについての、下のように流暢で論理的に筋の通った文章を読んでみよう。

その女たちの1人は象の下敷きにさせた。他の1人は銃で撃たせた。ブア⁹⁾は監視下においた。あの女も自らの行為のとりことされ、その報いを必ずうけることになるであろう。[p. 494]

本書の校訂テキストを見てゆくと、おそらく誤植によって刊本から刊本へと誤りが写された、詩の1行の原形を復元することができる。[ウズベキスタンの諸刊本において]「汝の体つき、ほほ、髪、腰について話してくれるか(Qad-u-khadd-u-sach-u-belini mu de)」という半句(ミスラー)を2回そのまま繰り返している¹⁰⁾詩の1行は、本書の校訂テキストでは、

あなたの眼、眉、言葉、言いまわしについて話しましょうか/あなたの体つき、ほほ、髪、腰について話しましょうか(Köz-u-qash-u-söz-u-tilini mu dey / Qad-u-khadd-u-sach[-u]belini mu dey) [p. 529]

と原形通りに復元されている。以下のことも注目値する。本書の校訂テキストにおいて「私が話しましょう」(aytaym)」という意味の語が、これまでのように二人称命令形“de”ではなく、“dey”(＞deyin)と正しく書かれているので、正にこのような、詩人の言いたかった美しい内容が明らかになるのである。

外観上は小さく些細な個々の訂正が、有効に、内容・論理に重要な影響を及ぼしていることを、以下の例で示すことができる。ウズベキスタンのすべての刊本には次のような文が存在する。

各人のそれぞれ一人を、その息子が常にアグラで私に仕えているべきことが決定された。 [1960年版, 6. 446; 1989年版, 6. 344]

この箇所では、古くから見られるように、君主が自分の配下のハーキムたちの近親者、第一に息子たちを、人質の意味で手元に置くことについて語られている。上に引用した文では「各

人のそれぞれ一人を、その息子が(har qaysining birārini oghli)」という語句のつながりが曖昧で、内容が不明確になっている。本書の校訂テキストで復元された原典の方で、これを、以下のように読もう。我々の考えでは、これは疑いなく正しい。

各人のそれぞれ一人の弟か息子が(har qaysining birār ini-oghlī)常にアグラで私に仕えているべきことが決定された。[p. 601]

正に同様に、ヒジュラ暦907年、西暦1501-1502年の出来事の叙述に関する部分では、原典に「……と彼が言った(dedi kim)」とある語を、ウズベキスタンの諸刊本では「……と私が言った(dedim kim)」と書き¹⁹⁾、別の人物の言葉を作者に関係付けていることは、内容に深刻な損害をもたらしている。問野教授は自身の校訂テキストにおいて、この欠点をなくし[p. 144]、叙述にある論理的な一貫性と統一性を回復したのである。

このような、内容や論理の一貫性と直接関係する数多くの訂正の中からは、もう一つだけを引用するにとどめる。バーブルはあるところで生じた不愉快な出来事に関係して、臣下たちの変化について書いている。この文はウズベキスタンの諸刊本では「私のもとにいた彼[=ティムール朝のアミール、ホスロウ・シャー Khusraw Shāh]の様々な臣下たち(nawkar-sawdarining turlari)に変化が見られた」[1960年版, 6. 214; 1989年版, 6. 140]と写されている。もとは、本書の校訂テキストからわかるように、バーブルは臣下たちの考え・言葉や行動・振舞い、つまり「態度(ṭawrlar)」[p. 240]に見られる変化について心配したのである。

ウズベキスタンで出版された諸刊本と比較することで、本書には、上述のような大小の肯定的な相違が多くみられることがわかる。これらの相違は、内容の完全さ、思考の明瞭さ、そして論理的一貫性を生じさせている。これは当然のことで、結局原典を完璧に復元することが不可能であるとはいえ、高度な学術的水準で作成された校訂テキストは、原典に極めて近付いている。そして、この長所によって、すべての一般向け、あるいは学術的出版物のための確固たる土台として貢献するはずである。

日本人研究者が京都市で出版した『バーブル・ナーマ』校訂本は、この偉大な作品の、今後のすべての出版の基礎になることは疑いない。

もちろん、本書の校訂テキストに個別の欠点がないわけではない。例えば、約束ごとではあるけれども、この作品を、「フェルガーナ」(pp. 1-182)、「カーブル」(pp. 183-400)、「ヒンドゥースターン」(pp. 401-610)と名付けた三部に分けて出版したことで、原典に全く手を加えないという、テキスト研究の条件が崩されたと我々はみなす。第二の指摘は、写本を書写した書記たちの誤り(あるいは誤植)であることが明白と思われる場合に関してである。問題としているのは、単語・術語が作品を通じて様々に綴られていることである²⁰⁾。例えば、校訂テキストの、同じ367ページに“sarīk gul”と“sarīq gul”の形が見られる[前者が誤植]。あるいは、“āsh”という語は幾度か同じ行の中ですら、ファトハ[→マッダ]の記号があるものとなないもの(“āsh”と“ash”)両方の形で綴られているが[p. 493]、作品原典においても正に同様であったと推測することは、論理に反している。書記たちの誤りが疑いないこのような例では、

単語や術語を正しく選別し、テキストでは一つの形に保つのが妥当である。このほかに“Ne barurgha quvvatim bar ne turarga t̄aqatim” という半句にある語が“QVBTYM”と綴られること[誤植][p. 112]や、“keyin”が“KYN”と綴られること[p. 307]は同調されない。

しかし、この極めて些末で容易に訂正できる欠点が、著者の偉大な学問的壮挙に、いささかなりとも影を落とすことはない。著者が大きな学問的かつ実用的価値を持つ偉大な研究を行い、バーブル研究に重要な貢献をなした、と言うに十分な根拠があるのである。彼が日本で出版した『バーブル・ナーマ／ワカーイー』校訂本が、我々ウズベキスタン国民の偉大な祖先の作品に関する、今後の学術研究に対して、確固たる基盤として貢献することは疑いない。

ザヒールッディーン・ムハンマド・バーブルの遺産に関して、新たに壮大な学術計画をたてた日本人研究者間野英二教授の、大きな学問的成功を心から祝う。彼がバーブルの生涯と著作について公にした研究、まず第一に彼が作成・出版した『バーブル・ナーマ』校訂本は、独立ウズベキスタンの権威ある国際勲章に値する業績である。

訳者追記

当該書については、他にも、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サクト・ペテルブルグ支部の T. Sultanov による書評が *Manuscripta Orientalia (International Journal for Oriental Manuscript Research)*, II-1 に発表されており、さらに、シカゴ大学の R. Dankoff による書評が、まもなく *Journal of the American Oriental Society* に掲載される予定である。あわせて参照されたい。

訳者注

- 1) 本書評の著者が当該書の「はじめに／Foreword」(pp. ix-xi / pp. xlv-xlvii)を参照した際、いくつかの誤解が生じている。その一例がこの箇所、間野氏は1960年のウズベキスタン版を、「一応の校訂テキスト」ではあるが、「校訂本と呼ぶには校訂があまりにも不十分なもの」とみなしている[p. ix]。
- 2) 当該箇所では「カザン本の他にも、他のより優良な写本を参照することによって、ペルシア語版から見ても当然あるべきはずのチャガタイ文を、多数補充することができた」と述べられており[p. x]、若干ニュアンスが異なる。
- 3) この2刊本に対する日本文での批評は、当該書の「序論」第4章「これまでに出版されたチャガタイ語テキスト」の(3)~(4)に収められている[p. xxx-xxxiv]。
- 4) これは誤解で、間野氏が計画しているのは「バーブルと『バーブル・ナーマ』に描かれた14-16世紀の中央アジアに関する論考を集めた研究篇」[p. xi]である。
- 5) これは、バーブルがバーブリーという名の少年に恋をするくだりで、恋慕の情が赤裸々に記されており、間野氏も以前から特に注意を払っていた箇所である[間野英二「『バーブル・ナーマ』の魅力」(三)『季刊 東西交渉』V-2 (1986), pp. 20-21]。ウズベキスタンの刊本において、この箇所は、1989年版では確かに削除されているが、[6. 69], シャムスィーエフとミルザーエフの1960年版では、ほぼ完全な

状態で収録されている [6. 132]。(※本稿印刷中に、本書評の著者より、ここで言う「ウズベキスタンの諸刊本」は「1948年版[本稿63頁参照]、1965年版、および1990年代に出版されたものを指す」という補足説明があった。)

- 6) 前掲注で述べたように、1960年版の『バーブル・ナーマ』には掲載されているが、この時は韻文として認識されなかったようで、散文部分に組み込まれている。
- 7) 本書評で明記されている箇所(当該書の pp. 192, 405, 406)に関しては、確かに1989年版ではアラビア語の部分が削除されている [66. 113, 233] が、1960年版ではキリル文字転写で掲載されている [66. 181, 323]。
- 8) 間野氏は、未発表原稿「『バーブル・ナーマ』「ヒンドウースターン章」日本語訳」において、この“BVA' / BVA”と綴られる語を「寡婦」(beva>biva)と訳出しており、人名とは解していない。
- 9) 前掲注で述べた通り、ここでも間野氏は“BVA' / BVA”を人名ではなく「寡婦」と解している。なお、この文章中の「他の一人は銃で……監視下に置いた」の部分は、カザン版ほかによって復元されたものである。先に引用されたウズベキスタン版の当該箇所では、そもそもカザン版が十分利用されていないと言える。
- 10) 1989年版では同じ半句を繰り返しているが [6. 303]、1960年版では、間野氏の校訂テキストと同様に、完全な1行が掲載されている [6. 401]。
- 11) 1989年版では「私が言った (dedim)」となっているが [6. 87]、1960年版では「彼が言った (dedi)」という正しい形で印刷されている [6. 153]。
- 12) この点を批判しているのは、本書評の著者が、当該書の「序論」第9章「綴字法」[pp. xli-xliii]を十分参照しなかったためである。そもそも間野氏のテキスト校訂の方針には、綴字法はできる限りハイダラーバード写本に従い、同一単語に対する綴りのヴァリエントを提示しようという意図がある。
 なお、「序論」の英語版および校訂本の正誤表が、間野英二著『『バーブル・ナーマ』の研究 II 総索引』松香堂(1996)に収められている [pp. xxxiii-lviii]。

(A. アブドゥガフーロフ Абдурашид Абдуғафуров：
 ウズベキスタン共和国科学アカデミー文学研究所)
 (A. オリンバーエフ Асомиддин Ўринбоев [ロシア語
 表記ではウルンバーエフ Урунбаев]：同 東洋学研究所)

(久保一之：京都大学大学院文学研究科)